

聴覚障害教育におけるキューサインの歴史と現状、
その意義に関する検討

障害者高等教育研究支援センター・准教授

脇中 起余子

キーワード

キューサイン、キードスピーチ、聾学校、発音誘導サイン、読話

研究概要

日本の「キードスピーチ」は、京都府立聾学校が用い始めたのが始まりである。ただし、京都校は、のちに「キードスピーチ」（コミュニケーション手段）になってはいけ
ないとして、「キューサイン」（口話法の補助手段）という語を用いるようになった。
キューは50音体系を可視化するものであり、指文字とは異質なものである（脇中，2017）。
ネットなどで「アメリカのコーネットが考案したキードスピーチを、京都校が取り入れ
た」という記述が散見されるが、京都校は、戦前から発音指導場面で使われた発音誘導サ
インを日本語指導場面でも使用して、小1からの小1の教科書の使用を可能たらしめたので
ある。また、「1968年頃に京都校でキューの使用が始められた」という記述も散見される
が、京都校が1965～66年のろう教育科学会で発表したのがきっかけであり、筆者は、京都
校が公開する前にキューで日本語を獲得した。そこで、京都校の研究紀要などをもとに
キューの歴史を詳細にまとめたり、京都の聴覚障害者に聞き取り調査を行ったりして、
1963～1964年度にはキューの使用が始まった可能性が高いことをまとめた（脇中，2018）。

京都校の発表後、キューの使用は全国に広がった。筆者らは、2018年に全国の聾学校に
対するアンケート調査を行い、キューを現在も使用する聾学校は回答校の約16%であるこ
と、キュー廃止校を含めたキュー経験校は50～54%と推定されることをまとめた（脇中・
原島・長南，2020）。また、現在のキューサインは聾学校によって異なっており、キュー
サインや発音誘導サインの使用の廃止は、指文字の導入という要因と密接に関連するこ
を見出した（脇中・原島・長南，2021）。

従来から「キューで育った子は、日本語の力や読話の力が高い例が多い」ことが指摘さ
れているが、乳幼児期におけるキューの使用は日本語、特に学習言語の獲得に寄与するこ
を示すデータを、現在収集・分析中である。

応用例・用途

障害者手帳をもたない軽度難聴児や人工内耳装用児であっても、いわゆる学習言語の正
確な受信が難しい例がみられるが、乳幼児期の短期間であっても、キューの使用経験が
「日本語で考える習慣」や「読話や聴覚活用の習慣」の形成に寄与するのであれば、今後
の聴覚障害教育の方法を検討する際の参考になるであろう。そのためにも、手指の操作性
が未熟な1～2歳児でも扱える「共通キューサイン」や「口形文字」を考案中である。

